

キャリア・ガイダンス

—就職試験総論—

学校法人 東筑紫学園

キャリア教育推進支援センター長
九州栄養福祉大学 兼任講師

中村 吉男 著

目 次

はじめに

ーキャリア形成とは何かー	1
--------------------	---

序 論

キャリア形成論としての作文・小論文対策	8
---------------------------	---

1. 心の力と言葉の力

ー人類社会の発展の重要な要素ー

2. キャリア形成論としての面接論

①面接試験とは	12
---------------	----

②面接試験で重視されるもの	13
---------------------	----

ー面接官は何を見抜こうとするのかー

③面接における心構え	19
------------------	----

④面接は礼に始まって礼に終わる	20
-----------------------	----

3. 社会の形成と発展の中で仕事を考える

ー人間は個的存在であると同時に社会的存在であるー

①法と民主主義の成立	22
------------------	----

②経済社会の発展と分業の成立	23
----------------------	----

③職業としての政治及び行政の成立と発展	24
---------------------------	----

④現代におけるキャリア教育の意義	24
------------------------	----

4. 仕事の意義と価値について

ー仕事を通して何を学び・何を実現するのかー

終わり	29
-----------	----

はじめに

—キャリア形成とは何か—

このたびの論文（テキスト）は、勿論キャリア教育に関する教育研究論文であると同時に、学生へのキャリア・ガイダンス用のテキストとしても使用できるような内容として執筆を試みたものである。

サブタイトルとして、就職試験総論としたが、就職試験とは、ただ社会人としての第一歩を踏み出すというだけのことではないのである。それは、今までの長い年月にわたって行われてきた人間の家庭及び学校教育の集大成として、最後の学業期間を修了することであり、人間の本来の役割（仕事）をなす最初の門関である。

人間は、社会的に仕事を通じて人類社会の進歩・向上・発展に寄与貢献するために長い教育を受けてきたといえるのである。

文科省は、「学生の社会的・職業的自立」をキャリア・ガイダンスとして意義付け、これを大学の教育課程及び厚生補導を通じて、実施することを大学設置法の改正によって義務化した。

これは、まさに教育というものが、本来学生の社会的・職業的自立のために、長年月にわたって行われてきたことを意味するものである。

しかし、そもそも、この社会的・職業的自立とは何かということをお先ずは明らかにする必要がある。そこで、この社会的・職業的自立の大前提になるものが2つ考えられる。

先ずは、人間の仕事というものを考えるに当たって、その大前提となるものから考察することにする。

一つは、精神的自立である。この精神的自立に失敗すると社会的・職業的自立はおろか生涯において自立が困難になるケースが多い。進路決定に当たっては、親や先輩の意見は参考にしてもよいが、最終的には、自分自身で決定しなければならない。

ここで進路決定に際して一方的に親の考えに従って、自分の本当に望まない進路決定をしてしまうと、子供は精神的自立に失敗する。

昨今、大学でも中・退学が増加しているが、この進路決定に当たって親が介入し親が進路決定したケースが多く見られる。あくまで、経済的に許容できる範囲内で子供の意思を尊重し、子供も自分自身で最後は決定しなければならない。

次に親からの経済的自立である。大学を卒業した後は、すべて本人の責任で生きていかねばならない。この段階でも親が経済的に援助し続け、子供の方も、親からの経済的支援を頼るようでは、子供は経済的自立に失敗する。

社会人になるというのは、その精神的自立と経済的自立をもって社会的に自立することである。しかし、そのためには、職業的に自立しなければならないのは当然のことである。

この精神的自立と経済的自立は、親の教育上の姿勢の問題でもあるが、子ども自身の覚悟の問題でもある。いずれにしても、先ずは、これをクリアーして初めて学生の社会的・職業的自立への道が開かれるのである。もし、この大前提が崩壊していれば、学生の社会的・職業的自立を計ることは困難である。

以上の2つの自立を大前提として、その上で、学生が社会に出る前に当然理解しておかなければならない仕事論として論述した。

ここで、注意しなければならないのは、人間が職業に付くためには、長い年月にわたって行われ

てきた教育があるが、その中で、従事する職業に必要な基本的な知識、職業によっては専門的な知識や技術、そして必要な資格も身につけなければならないということである。

それらを身につけることは、仕事をするに当たって、当然のことである。更に、社会人としてのマナーや礼儀などもマスターしておくことは重要である。しかし、それらだけでは、十分ではない。

仕事を選択し、仕事をしていくということは、どのような人生を送るかということとイコールである。そこに、人生における成功も不成功も、また、幸福感や充実感を得るか、失敗や挫折感で人生を終えるかを決定付けることにもつながるのである。

理由は別として、日本では毎年 3 万人前後が自殺をしている。教育の世界でも、およそ 90 万人の教員のうち約 5000 人が、精神的病によって、休職しているのである。ニート・フリーターは 200 万人とも 300 万人とも言われている。

社会人となり、仕事をするには、専門的知識と技術だけでなく、仕事に対する姿勢や考え方というものが、大きなウエイトを占めるのである。

このキャリア・ガイダンスのテキストは、その社会人となるに当たって、仕事というものをどのように考える必要があるかという視点で捉え、今から社会に出る学生だけでなく、新入社員そして、仕事で躓いている社会人すべてに向けて書かれたものである。

現在、産官学を挙げてキャリア教育が提唱されている。それだけ、人間が、仕事を遂行していくということは、個人のみならず、企業にとっても、又国家・社会にとってもいかに重要なことであるかということである。

この論文は、就職試験における面接や作文・小論対策から論じている。そして、そこから、深く仕事というものの世界に入っていくことになる。仕事というものを深く考えながら、読み進んでほしい。

大学生である以上、単なる夢や希望だけで仕事が順風満帆にいくものではないということを知らなければならない。むしろ、現実の仕事では、映画やテレビにあるようにきれいごとばかりではない。企業や組織が要求するレベルに達しないときは、厳しい指導だけではなく、降格人事でさえ行われるものである。企業は生き残りを賭けて戦っているのである。

そこに、仕事に向かう真剣な姿勢と努力なくして、ただの夢や希望では、それは白日夢か空想に過ぎないのである。ただの白日夢や空想が実現することはない。

そこで、学生は仕事を考える上で、当然自分の天分は何であろうかと考えるであろう。職業選択に際して、自分の天分能力を知ることは大切なことであるが、しかし、それを知って職業を考え選択することは中々難しいものである。むしろ、天分能力というものは、仕事を通じて通常養われ自覚されていくものであって、最初から自覚され身につけているものではないのである。もちろん中には例外はあるとは思いますが。

むしろ、自分はこの世に生まれてどういう生き方をすべきなのか、というような人生に対する真摯な思いを持ち続ける事が、その人にとって最後は天分・使命にかなった道が自然に開かれていくのではないかと思われる。

キャリア意識の形成とは、単なる職業選択の問題でもなければ、また専門職業人としての意識形成の問題でもないということである。

自分はこの世に生を受けて、人間としてどういう生き方をする必要があるのであるのか、ということを考えるために、この社会・国家および世界というものはどのようにして成り立っており、人類はどのように進歩発展してきたのか、ということを理解しなければならないのである。それは、真摯に人

生を考え、そして仕事を考える前提になるからである。

前述したが、そもそも、仕事をする上で専門職業人としての知識・技術と自覚が必要であるのは当然のことである。仕事上のスキルがなくしては、もともと仕事にならない。そういう意味でのプロ意識や専門技術は、仕事をする上での職業人としての最低限の義務である。

この専門的知識・技術や専門職業人としての意識はどの職業に就くにしても、なくてはならないものである。入学当初から決めていた職業選択の中で、スキルを磨いて国家資格などを取得するか、学生時代に自分で将来進むべき道を見出して自らそのスキルを磨いていくことで就業に向けて準備するかは別として、ある程度のスキルと知識そして資格が必要な専門的職業であれば、その専門職業人としての職業意識を持っていることは仕事上の大前提である。

しかし、それだけでは、仕事をする意義というものを理解していることにはならないのである。専門知識・技術と専門職業意識だけでは、厳しい企業環境の中で企業や組織が生き残っていくのは難しいのである。

たとえ専門的スキルがいくらあっても、仕事というものを生活の資を得るためだけにしているような姿勢や考え方では、積極的・主体的に仕事に取り組む姿勢は生まれてこないであろう。

その積極的・主体的な姿勢がなければ、どんな小さな内容でも、仕事を改善したり、効率を上げたりすることはできないであろう。また、柔軟な対応などもできないであろう。その結果、そういう者の多い組織や企業は、遅かれ早かれ経済社会から取り残されて市場から消えていくであろう。

常に「改善」を心がけない組織に明日はないのである。また、大半の企業はそのような積極性や主体性のない学生を採用しようとは思わないであろう。まさに、企業の存亡にかかわってくるからである。

また、仕事というものは組織においては一人でやっているわけではないので、協調性や相互の信頼がなければ共同作業はできない。しかし単に協調性だけでは、そもそも仕事にならない。仕事を通じて、組織は進歩発展していかなければならないのである。そのためには、改善点があれば、それを上司に対しても、説明して理解してもらわなければならない。それは、ある意味ではリーダーシップと言われるものであるが、わが国では一般的に「コミュニケーション能力」と呼んでいるところのものである。

企業において、採用に当たっては、やはり、暗い雰囲気で人との円滑な交わりの少ない人間よりは、明るく快活な雰囲気の人間を採用したいであろう。暗い雰囲気は職場全体を暗くするからである。それは作業効率にも影響してこよう。

作業効率は非定型的（インフォーマル）な上司や同僚との人間関係に大きく作用されるということを実証した有名な「ホーソン工場の実験」は経営学・行政学における組織論の通説となっている。

経済産業省が、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力として「社会人基礎力」というものを打ち出したが、それは「前に踏み出す力」・「考え抜く力」・「チームで働く力」としている。

「前に踏み出す力」とは、積極性・主体性・実行力などであろう。また、「考え抜く力」とは、最初の「前に踏み出す力」や、そもそも「仕事への熱意」がなければ、最後まで考え抜く力は出てこないであろう。そして「チームで働く力」とは、まさに「コミュニケーション能力」のことである。

この「社会人基礎力」は、経済産業省が経済界から意見聴取やアンケート調査を行って学生に求める就業力としてまとめたものである。産業界が学生にこれらの資質を求めている背景には、逆にこれらの資質が産業界にとって重要であるにもかかわらず、現代の学生に希薄なものであるからこ

そ求められていると言えるであろう。

これらの学生に求められる資質・能力と仕事を行う上での必要な専門知識・技術や専門職業意識とは根本的に異なるものであるということを理解しなければならない。

仕事によっては、学生時代に学んだ基礎的知識と技術の上に企業で更に経験を積んでスキルアップしていくことも多いであろう。しかし、いずれにしても、仕事をする以上専門的知識・技術そして専門職業意識などは、あって当たり前なのである。そういうものがないというのはもともと論外である。

キャリア教育とは、その専門的知識・技術と専門商業人としての職業意識以前の仕事そのものに向かう姿勢や考え方の問題から始まるものなのである。

経済産業省が提唱している「社会人基礎力」とは、まさに、専門知識・技術そして専門職業意識の前提であり土台となる能力であり、社会で仕事をするものとしてその基礎となる人間のものである。キャリア形成論とは、その土台となるものを、いかに形成するかという理論である。加えて、今回のこの論文は具体的実践論としても論述したものである。

また、高等学校までの知識では、現代のように職業が複雑に専門化・細分化した社会にあっては、一般的に言って、ほとんど実際の仕事に直接役に立つものではないという事は理解できるであろう。大学や専門学校に行く段階において、職業訓練的な学校や専門性の高い大学や学部を除いて、高校の段階で将来の自分のなすべき職業が明確になっている人は少ないであろう。

ところで、大学や専門学校で専門的な能力の養成は当然できるが、それでも、実際の仕事で習得して行く能力の比ではないであろう。ましてや、これが天分の自覚となると、余程のことがないかぎり大学の段階までにわかるというのは極めて少ないと思われる。たとえ、職業専門的な大学や専門学校に行ったとしても、その段階で本当の自分の天分を自覚できているとは限らないであろう。また、仕事というものの意義や価値が理解されているということも稀であろう。

やはり、天分の自覚は、与えられた仕事に真剣な姿勢で臨みながら、実際の仕事を通じて色々な経験を積み、種々の困難と思われるものを乗り越えていく中で、徐々に自覚されていくものだと思う。

そういう意味では、どんな職業に就くにせよ、学生にとって先ず、仕事というものは何のためにあるのか、又、人間の社会と人間の仕事とはどのようなつながりがあり、意義を持つものであるのか、という事を理解することが先決である。ここに現在、世界各国でキャリア教育が唱導されている理由がある。

人間としての仕事の本質を理解することで、人間にとっての真の成功とは何か、という事もおのずから理解されてくるであろう。

仕事を考えるという事は、おのずから人生を考えるということである。そして、人間の社会や人類の進歩発展を考えることを通して、そこから、生かし合いの世界、共存共栄の世界そして無限創造の世界が存在することも理解することになるであろう。又、社会や国家というものは漠然とした抽象的なものでなく一個の生命体・有機体として存続していつているという事なども認識する事になるであろう。そこから再び翻って、仕事の意義と価値を理解することが必要であろう。

どのような仕事であれ、その仕事から得られる満足感なくしては、充実した人生を送ることは難しいのではないと思われる。充実した仕事なくして充実した人生はないといっても過言ではない。

もともと、仕事は生活のためにあったのは事実である。その生活には、やはり衣食住が原点であった。人間の生活というものはそのまま衣食住であった。

そして現代においてもそれは仕事というものの根底をなしていると思われる。人類の生活がより高度になっていったとしても、常に衣食住が原点であり、仕事というものの発生の原点であった。

しかし、生活の手段としての仕事をしている中で、人間の本質的欲求からくる改善と向上の意欲によって道具や仕事そのものの改善や効率化をもたらし、その結果人間生活における衣食住の質の向上や社会生活の高度化をもたらしてきたのも歴史が証明するところである。

人間社会の生活の質の高度化は仕事そのものの工夫の中で、仕事自体が高められ、ただの道具やただの衣食住であることを超えて、美としての価値を持つ高さにまで高められたのである。それが絵画であり、陶芸品である。また衣装もただ寒さをしのぎ、裸体を隠すだけのものから、より機能的なものへ、そして更に、美としての価値を持つ高さにまで高められていった。

踊りも音楽も、もともと生活の一部であり、集団生活を送る中でのひとつの儀式でもあった。その踊りや音楽が独立していく中で、いろいろな楽器も創作され、更にそれが、クラシックやわが国でも日本舞踊として美的な高さまで高められていったのである。

それが、芸術というものである。それは同時に、その各民族の独特の文化をも形成していったのである。

しかし、このような美を追求する芸術といえども、すべて人間の生活の中から生まれてきたものであり、常に仕事は生活に根ざしたものであることに変わりはない。

しかしここで考えられることは、人間には単なる進歩発展を目指す向上心だけでなく、美を追求する精神的なものを内在せしめているということは重要である。また、芸術を創作するものも、その芸術を味わうものがあるからこそ価値が認められるのである。万人に美的なものを味わい、そして追及する心が内在している証拠である。

そして、芸術そのものを仕事とする者も出てきたのである。

更にまた、中世イタリアに端を発したルネッサンスによって人間理性に基く真理追求は科学技術の発達をもたらして産業革命にまでつながり、更なる人類社会及び経済の発達をもたらしてきたのである。ここに、人間には美的なものだけでなく、理性に基づく真を追求する精神的なものも内在しているということも実証できるのである。

ここにまた、この科学技術そのものの発展に貢献する職業も成立してきたのである。この発展は、住の世界でも大きく貢献しており建築工学などの分野も成立し、住の世界を高度化し、更に建築美を追求する芸術の世界にまで高められてきている。

生活の必需品であった乗り物も馬などの動物から、科学技術の発達によって、科学の粋を集めた電車・自動車・飛行機などになってきた。それらも技術の高度化だけでなく美の追求もなされており、科学と芸術の究極の一致が模索されている。

また、科学の発展は、病人を癒す祈祷の世界から、医学を発達させ高度な専門性を持つ職業を成立せしめた。

オリンピックに見られる各スポーツ競技でも、その起源はまちまちであろうが、いずれにしても、生活の一部から発生して自然に競技として成立していったのは間違いないであろう。人間の生活の中に娯楽や競争というものが人類共通に内在するということである。真や美を追求するのと同様に、集団で娯楽を享受し集団内で競争する性質を共有していることも人間社会特有のものである。特に体操競技やシンクロナイズド・スイミングそしてフィギアスケートなどは、スポーツとしての技術を競うだけでなく、人間に内在する美的追求も取り込んで芸術に近づいているともいえる。

このスポーツも更に高度化・専門化・細分化する中で職業として独立していった。ここで、娯楽

の問題は人生における仕事を考える上で重要な問題を含んでいるが、いずれにしても、この娯楽自体がやはり高度化・専門化・細分化していく中で、職業としてのタレント業が成立していった。そしてタレント業自体も細分化を続けている。

要するに、人間に内在する本質的な性質・精神性によって人間社会が高度化・専門化・細分化しながら人間社会が進歩発展していているということを理解する必要がある。その中で種々の職業が成立していき、その職業そのものも更に高度化・専門化・細分化していくのが、人類の発展過程であるという事実である。この人類の発展の根底に流れているものこそ、何事においても高めあげ完璧を目指す人間の向上心であり、より良きものを目指す進歩への欲求であり、真や美を追及する哲学的・芸術的性向である。これが、仕事そのものの進化（深化でもある）と拡大を続けている理由であるといえる。

また、人類社会の発展の中で欠かせないものは、宗教の存在である。これも科学と同様に真理追求の人間に内在する本性から生まれたものであるが、同時に善の追求心とも合体したものである。

更に、社会の進歩に目を向ければ、社会が拡大し構成員が増加すればするほど、社会の統合のためのリーダーや法の存在を必要としていったのである。そこには、社会の高度化・専門化の象徴として、マックス・ウェーバーが「職業としての政治」や「職業としての学問」で著したように、政治家や大学における学問研究者も職業として成立していったのである。

また、特に経済の発展は、国内のみならず、世界的な自由貿易を推進し、現代にあっては一国の垣根を越えてグローバルな世界を実現している。ここに人類が目指すべき共存共栄の世界も見えてきたのである。

この間の消息は、本論文でも改めて詳しく論じていくが、いずれにしても人類社会の発展進歩と仕事の高度化・専門化・細分化の中で、現代は逆に、仕事の持つ本来の本質や意義というものがわかりにくくなってきたといえるであろう。

アメリカにおいてキャリア教育が提唱された原因の一つに、大学進学率が約20%にもかかわらず高校までの授業内容が大学進学へ向けた内容となっており、職業意識を持たない高校生の退学が増加している現状があった。学校教育が現実の職業や社会から乖離していているのはアメリカのみならずヨーロッパおよびわが国においても同様である。

しかし、学校教育が現実の職業や社会から乖離していったのは、前述してきたとおり、人類社会の発展進歩および仕事そのものの高度化・専門化・細分化がある。

そのような状況の中で、何のために仕事はあるのか、また自分はいかなる職業を選択すべきなのか、そもそも何のために勉強するのか、人生は何のためにあるのか、自分は何のためにこの世に生まれてきたのか等、学校教育の世界で明快な解答を見出せずにきているのが現状であるといつてよい。

「勉強は何のためにするのか」という問いに対して、親や教師から学生の本分として勉強しなければならないと繰り返し言われても、子供達には理解できないのは当然である。そもそも学生の本分といわれても学生の本分が何なのかかわからないのである。おそらく親もわからないのではないだろうか。親はただ学生の本分は勉強することだと位しか思っていないであろう。問題は何のために勉強するのかということなのだが。

そして、勉強と仕事というものとの関係性や社会における人間の役割というものを理解できないまま、多くの子供達が勉強を強いられているところに現代教育の歪みや問題が存するといつてよい。また、ここにこそキャリア教育が必要となっている理由もある。

アメリカの「キャリア教育の父」とも言われている元米連邦教育局長のマーランドが全米中等学校校長会年次大会の席上で「すべての教育は、キャリア教育であるべきである」と語ったのも、そのような教育界の現状があったからだと推察できる。

そういう意味で、今回のキャリア形成論では、何のために学校で勉強しているのかということも理解できるものとして論述した。

現代社会の複雑化の進展の中で仕事の全貌がつかみにくくなることで、学校教育においても仕事や社会というものを体験的に理解するのがますます困難になってきたのである。一部学校教育の中で、インターンシップ制度も導入されているが、仕事の全貌をつかむのは困難である。それ故、子供たちに将来の夢を尋ねると、テレビで人気のある職業やスポーツそして身近にあるお店や職業に集中してくるのである。

ここに仕事というものの意義や価値を理解できない、もしくは持つことが困難な社会状況が生まれてきたといえる。これは、世界各国とも同様である。現在キャリア教育が世界各国で特に先進国で提唱されている背景でもある。現在のように現実の仕事と学校教育の世界とが、かくも大きくかけ離れていったのには、人類社会の発展の中でむしろ必然のことであったとも言えるのである。

このような状況の中で、現代の学生がただ生活の資を得るためだけで、仕事を考えるのでは、あまりにも短絡的であり、適切な職業選択とは決して言えないであろう。社会は専門的な、そして意欲満々でしかも協調性のある職業人がますます必要となっているにも拘らず、学生の側からは仕事というものがますます見えなくなっているのである。ここに本当の意味での職業選択の上でのミスマッチがあるのである。自分にあった職業とのミスマッチではないのである。

ところでこの論文は、面接論から始まっている。面接試験こそ、その人間の仕事に対する心構えが最初に問われる場であり、そして、実際の仕事ぶりにつながっていくものである。それだけに企業は面接を重視するのである。“企業は人なり”とは、経営の神様といわれたドラッカーの言葉である。その人物を最初の面接で見極めなければならぬのである。それで、慎重な企業は、2次面接3次面接は常識で、5次面接まで行うところもあるのである。

そういう意味でも面接を軽視するものは、仕事そのものを軽視することと同じなのである。そこで、本論文は「面接とは何か」というところから始めている。そして、現代において、非常に理解困難となってきている仕事というものを、できるだけわかりやすく多面的に論じることで、学生の生涯にわたる仕事観の形成に役立てたいと考えている。

茶道や華道そして武道と呼ばれるように、仕事においても仕事道という道がある。

結論から言うと、いずれの職業においても、それを仕事道とすることが大切である。仕事道とは何か。それがこの度のキャリア形成論の柱の一つでもある。

更にこの論文は、東筑紫学園の学生・生徒をも視野に入れて論述しているが、本学園は建学の精神である「勇氣・親和・愛・知性」の調和的発達をもって人間教育の柱としている。

この勇氣・親和・愛・知性の心はこの論文の随所にちりばめて論じた。ただし、この論文（テキスト）は本学の学生・生徒のみに通用するものであっては、その普遍性（真実性）がなくなるので、実際誰にでも適用できるものとして論じた。

加えて本学園の建学の精神の背後にあるのは、わが国の伝統的な精神である「神ながらの道」である。ただし、これも日本だけに通用する道であっては、普遍性を担保できないので、随所に隣接諸科学および諸宗教の内容なども引用している。真理は客観的合理性と普遍性を持たなければならないからである。

生涯にわたる仕事ほど人生にとって重要なものはない。人間は仕事を通じて社会国家および人類の維持発展に貢献していく。そして自らも成長していく。仕事は人生そのものである。しかし、その第一歩は、現代における仕事の意義と価値を正しく理解することから始めなければならないであろう。

序 論

キャリア形成論としての作文・小論文対策

“文は人なり”とは、古くから言われてきたことであるが、まさしく文章は、その人間の“人となり”を表現するものであることは間違いない。それどころか、その人の見識や考え方そして人生観まで現れるものである。

それ故、就職試験において、作文や小論文が面接と並んで、重要なウエイトを占めるのは当然である。面接では、受験者の作文や小論文の内容から質問をする場合も多い。

採用担当者（試験官）は、作文や小論文から受験者の何を見抜こうとしているのであろうか。それは、文章表現のうまさではない。又、文章の論理性や一貫性でもない。

それは、前述したように、受験者の見識や考え方そして人生観である。文章上の論理性・一貫性などは、それらの受験者の見識や考え方をいかに正しく、そしてわかり易く試験官に伝えるかという点において必要なテクニックである。

そういう意味において、テクニックも重要である。いくら、見識があろうと、その表現におけるテクニックがまずければ、試験官に正しく自分の考えや志向を伝えることができないからである。

また、書き方のルール（句読点やかぎ括弧などの原稿用紙の使い方など）は、守らなければならないのは、当然である。誤字脱字は論外である。

書き方（テクニック）は、練習によって上手になるものである。勿論、一回や二回の練習でうまくなるというものではないが、練習によってある程度（就職試験に必要な程度）の文章は、書けるようになるものである。小説家や論述家を目指すのであれば別であるが。

問題は、その作文や小論文の内容である。以下、その重要ポイントを先に書いておくと、

- ① 仕事に対する姿勢・考え方（仕事というものをどのように考えているか）
- ② 自分が携わる仕事の専門的知識
- ③ 受験する会社の経営理念（社訓など）及びその業界の知識
- ④ 人生観（何を人生のモットーとしているか、自分自身が大切だと考えているか、そしてそれを実践する努力をどれだけ行っているか）
- ⑤ 仕事に対する熱意と自己信頼の深さ

以上のものをまとめて、その人間の「見識」と言ってよい。しかし、このような見識は一朝一夕で出来上がるものではない。そこに、作文・小論文の本当の難しさがある。

仕事を考えるということは、人生を考えるということである。そして、人類社会における職業というものを理解する必要がある。

仕事を単なる生計を得るための手段や生活の安定のためにただ正社員になればよいと考えているようでは、いかなる「見識」も持つことはできない。そのような思いは一般的に誰もが考えること

だからである。実際、そのような仕事観では、そもそも仕事への強い熱意や改善への努力は生まれてこないであろう。バイトでは採用されるかもしれないが、正社員としては厳しいものがある。

そのような、誰でもが普通に考えるような一般論では、就職試験における作文・小論における内容が説得力を持たないのは理解できるであろう。

内容のある作文や小論が書けるためには、学生時代に、日頃から自分の仕事というものを深く掘り下げて考えていなければならない。それが、真の「見識」を生む土壌となるのである。

これより、仕事というものをいろいろな視点から考察した内容が続くのであるが、じっくりと腰を据えて読んでいってもらいたい。その際、注意する点は、文章に読まれてはならないということである。

文章は読み込まなければならない。そして自分のもの（自分の考え・信念・自信）にしていかなければならない。それが、“血肉と化す”ということである。

1. 心の力と言葉の力

—人類社会の発展の重要な要素—

実は、皆さんに是非とも身につけてもらいたい力があるのである。仕事を通じて人生を推進する強力な力があるのである。しかも、それは人間の内部にある力である。そして、その力は真善美を求める心や愛や知性を本来的に誰もが持っているように、誰もが所有する力なのである。

しかしその力は先ず自分自身が認めなければ出てこない力である。この力は先ず認め、そして行使しなければ存在しないに等しい力である。それは「言葉の力」である。

言葉は単に会話や伝達・意思表示の手段ではない。言葉は人を地獄に突き落とすこともできるし、逆に人に喜びや自信を与えることもできる。人を生かすも殺すも言葉である。まさしく、その力は人を動かす力である。

軍隊の司令官の命令で多くの将兵は命をも捧げるのである。教育者もその言葉で大半は授業をするのである。子供に勇気や自信を与えるのは親や教師の言葉の力である。また、劣等感を与えるのも親や教師の言葉である。勿論、学校の教科書もすべて言葉で書かれている。

この言葉こそ人間と動物を分ける最大のものであり、人類の発展の原動力となっているものの一つである。

一国の政治体制を決める根本は憲法である。この憲法は勿論言葉で書かれている。国家を秩序整然と維持していくために、その憲法に基いて何千という法律があるが、これらもすべて言葉で表現されているのである。現代は法治国家と言われているが、そういう意味では国家は言葉によって成り立っていると言っても過言ではないのである。

講演によって人を感動させることも悲しませることもできる。有名な「人民の人民による人民のための政治」と言う言葉で演説を行ったリンカーン大統領のゲティスバーグの大統領就任演説は、世界中の人にデモクラシーの原点を集約した言葉として今でも感動を与えているのである。

そもそも、フランス革命やイギリス名誉革命によって民主主義が世界中に成立していったが、その革命的行動を取らせたのもルソーやロック等の思想である。この思想と言うものも当然言葉で書かれているのである。昔から「ペンは剣より強し」と言われているが、ある意味ではそれ以上である。言葉は人を動かし国を動かし、そして世界を動かすこともできるのである。

言葉は同時に人間と人間の潤滑油にもなる。組織の中で、毎日挨拶をするかしないかだけでも全然違ってくるものである。“親しき仲にも礼儀あり”と言われているように、どんな親しい間柄であっても日常の挨拶ほど大切なものはない。人にお礼を述べるのも言葉である。感謝の気持ちも言葉で表現するであろう。生涯を決める結婚のプロポーズも言葉で行うのである。

現代社会は契約社会といわれているが、この契約もすべて口頭であれ文書であれ言葉で行っている。契約は法的効力を持つものであり、それに違反すると法的処罰の対象ともなる。言葉が法によって秩序付けられるとそれは国民および社会国家を統率する力となるのである。

人間社会における人間関係の重要なものの一つに、上記の契約だけでなく通常の約束を守ることがある。それは人間の信用と信義に係るものであるだけに、個人においても会社等においても約束を破り反故にすることは人間社会の中では契約違反以上の信用失墜につながるのである。その約束も言葉で行うのである。

言葉には信がなければならぬのである。わが国では“武士に二言はない”という言葉があるが、それは、信義を守ることがいかに大事なものとしていたかの証拠である。

言行一致という事もよく言われる。又、有言実行や不言実行という事もよく言われている。言葉で表現しようがしまいが、言葉と行動は一致するという事が、人間が信用される重要な要素であることは間違いない。言葉はそれ程重要なものである。

キリスト教のヨハネ伝第1章にも「太初（はじめ）に言葉あり、言葉は神とともにあり、言葉は神なりき、万（よろず）の物これに由りて成り、成りたる物の一つとして之によらで（「よらないで」という意）成りたるはなし（「成立しないものはない」という意）。之に命あり、・・・」とある。

キリスト教では神は天地万物の創造主である。そして、言葉が神であれば、言葉こそ万物の創造主であるといえる。

言葉は、人間の人生の創造のみならず、国家及び人類社会の創造発展も言葉が先行しているのである。言葉が初めにあり、そして言葉によってすべての物が作られ、これに生命が吹き込まれる。人類社会は、言葉によって成立しているのである。国家の存亡を賭けた戦争における宣戦布告も言葉によってなされる。

国家を再興する計画も言葉によってなされる。言葉は、人間個人のみならず国家及び人類社会の運命までも決するのである。

わが国においても、言葉には魂が宿り物事を実現する力があると古代から信じられてきたのである。それを“言霊（ことだま）”と言っている。そして、わが国を“言霊の幸はふ国”と呼んできたのである。

よって、言葉を軽視するものは、人生を軽視するものとなる。更に人類社会を軽視するものでもある。就職における意思表示もすべて言葉によってなされる。しかし、この言葉には信がなければならぬのである。この信こそ面接や作文・小論文などにおいて明暗分けるものである。ところで、言葉における信とは何であろうか。

同じ言葉でも相手に信頼を与えるか不信を与えるか分かれることがある。それはどうしてであろうか。言葉はいくら巧み（上手）でもどうも信頼できないと言う人がいるからである。

言葉には人を動かす力があるといっても、信念のない言葉は人を動かすことはできないであろう。又、人を尊重する心のないものも人を動かすことはできないであろう。言葉はその人の人格と見識そして信念から発するものでなければならぬ。そしてその信念は決意と覚悟、更に努力と忍耐などの精神力を背後に持たないと信念ある言葉とならないであろう。

更に、言葉は自ら血肉と化したものでなければならない。そのためには、常に心に深く思い続けているものでなければならない。又、深く考え続けているものでなければならない。

その考えや思いというものが、言葉となって表出するのである。特に、文章によって表出された言葉は、その人間の考えや想念を整理し、それを更に深めていくのである。日記は、そういう意味では、誠に重要である。

そして、その考えや想念によって表出された計画に基いて、物事は具体化していくのである。企業における事業計画もそして国家的計画も同様である。

更に、そのような考えや想念とそれに基く実行によって、その考えや想念は信念となっていくのである。言葉には、信念がなくてはならない。その信念に基づく言葉によって、遂に自分の運命そのものまで形成していくのである。

問題は、「何を」「どのように」思う（想う）かである。これらを含めて、人間のキャリア形成というものを考えていく必要があるのである。

“想像力は創造力”となるのである。“想う”という心の力と言葉の力によって現象界の出来事は実現していくのである。しかし、言葉の力を信の力にまで高めるためにも、やはり日頃の真剣な思いや熱意そして努力が根底になってくるのである。それに加えて、人生や仕事に対する「考え方（姿勢）」というものが重要となってくる。

何のために人生があるのか、何のために人間は仕事をするのか。人間の使命や天分とは何か。人間は、この世に生を受けた以上、このようなことを真剣に考えなければならないのである。人生を浮き草のようにフラフラと生きるわけにはいかないのである。

想像力は言葉の源であり、その言葉の力によって物事が創造されるのであるということ述べてきたが、しかし、何でも呪文のように言葉を唱えれば物事が実現するのではないのである。心の中で、これは実現不可能であろうと思っていたのではいくら言葉で表しても実現することはないのである。それは、ただの空念仏で終わるだけである。

「必ずできる」と言う信念で言葉は唱えなければならないのである。自己暗示療法を提唱したエミール・クーエはその著「自己暗示」の114頁に、「だめだ、できない」と「想像」したらもう絶対に不可能であると述べている。「できない」と想像したら、いくら意志の力で「しよう」と思ってもできないのである。「できない」という想像力が、現実にはできない状況を創造するのである。想像力が意志力に勝るという事を証明したのである。

勉強でもいくら頑張っても「しよう」と思っても「できない」という思いがあれば、その科目をマスターすることは不可能なのであるということである。

アメリカ合衆国で黒人初の大統領となったオバマ大統領は、その大統領選挙の戦いの間ずっと国民に唱え続けた言葉がある。それは、「Yes, we can.」（我々はきっと実現できる）という言葉であった。黒人差別が根強く残っているアメリカ合衆国で黒人が大統領になるなど奇跡に等しいことであった。

私には宇宙を創造した力（それは愛や知性）が宿っているのであるから必ず「できる」のであると思つて後は全力を注いでいけば良いのである。“人事を尽くして天命を待つ”という言葉があるが、ただ人事を尽くすだけではだめである。「必ずできる」と信じて人事を尽くさなければならないのである。そのとき言葉は創造主となる。

人間と動物を明確に分ける最大のものは、言葉を使用するか否か、そして想像力を含めた心の力を活用できるか否かである。これによって人類は、神の天地創造と同じように現実の人類社会の中

で無限創造の世界（個人とあらゆる組織・国家・人類社会）を構築していつているのである。

2. キャリア形成論としての面接論

①面接試験とは

あらゆる企業や組織における採用に当たっては、必ず面接試験というものがあるのは誰でも知っている。中には、厳しい1次試験に合格（2%～5%の合格率）しても、2次面接で3分の1から2分の1が落とされる公務員試験もある。

売り手市場（労働力を提供する側より労働力を雇う側の数の方が多い労働市場）では形だけ面接を行うところもあるが、一般的にはやはり面接の重要度は、採用にあたって決して小さいものではない。

筆記試験や小論文だけで、その本人の意欲そして会社に対する覚悟等が分かるのであれば、面接は必要ないであろう。面接を必ず行うのは、面接でなければその本人の本当の思いや決意が判断できないからに他ならない。

「面接」とは読んで字の如く、直接目の前で試験官と対面することである。例えば、いくらエントリーシートや小論文で「・・・私は貴社に日頃から好い印象を持っており、就職させて頂いた暁には、全力で頑張りたいと思っております。・・・」と書いてあっても、実際に会って好い印象というものを具体的に聞いてみなければ、ただのきれいごとを並べ立てた作文かもしれないのである。

心理学者アルバート・メラビアンの名を取って「メラビアンの法則」というものがあるが、人間が持つ好意や反感は、実際に会ってみて、たとえ言葉でいくら好意をもっているといっても、その言葉の内容に対するメッセージの強さ（真実性といっても良い）は、全体の7%に過ぎないと言っている。そして、非言語である声のトーンや口調等のメッセージが38%、ボディランゲージ（表情や身振り等の身体言語）のメッセージが55%を占めるという法則である。

つまり、本人が言ったとおりの言葉よりも非言語コミュニケーション（38%+55%=93%を占める）の方を重視し信用するというものである。中国の孔子の論語にも「巧言令色すくなし仁（言葉巧みな美辞麗句ほど人間の本当の善なる動機は薄いものだ）」とあるように、作文だけでは、人間の真意は測りがたいものであり、むしろ言葉とは裏腹の場合も多いということである。しかし、真の意味で言葉というものは最も重要なものでもある。これは本論文の第5章で論述している。

多くの面接官も第一印象が大切であると述べている。その人間の全体から感じられる雰囲気である。この雰囲気だけはエントリーシートや適性検査では分からないのである。この人間の雰囲気や印象は、実際の職場における上司や同僚との人間関係の原点にもなるものであり、職場の雰囲気をつくりあげるものでもある（例えばいつも苦虫を嘔み潰したような表情で雰囲気の良い人物が職場に一人でもいると職場全体が暗い雰囲気になるような場合を思い起こすことができるであろう）。

このことは、経営学における実験として有名な「ホーソン工場の実験」でも実証されている。インフォーマル（非定型的）な人間関係（例えば、上司や同僚との人間関係）が、フォーマル（定型的）と呼ばれる時間管理や照明や作業工程管理（これらを当時科学的管理法と呼んだ）

など以上に、仕事の能率に大きく影響しているという事が判明した。この実験以来、経営学上の一大潮流となった人間関係論は、その後著名な経営学者のバーナードなどの意思決定論や欲求5段階説で有名なマズローなどのモチベーション理論へと発展していったのである。

何故、面接が大切であるか。それは、人間全体（言葉・態度・表情等）から感じる雰囲気というものは、実際に会って見なければ分からないからである。

そしてその雰囲気（その人間全体から感じる印象）というものが、実際の仕事をしていく上で、実に大きな仕事をするものであるということを、企業社会においては共通に理解されているからである。

その人間の人格的雰囲気の中には、次の精神的雰囲気も含まれるのである。それは、その人間の誠意と熱意である。そしていかなる困難をも、ものともせず乗り越えることのできる勇気や信念である。

企業にとっては1回から数回の面接で、これらの精神的要素を見極めなければならないのである。それ故、受ける側も型どおりの面接試験の準備で決して対応できるものではない。企業にとって、これらの精神的な要素が何故重要なものであり、そして従業員に求められるのか、その理由は次に詳述することにする。

②面接試験で重視されるもの

—面接官は何を見抜こうとするのか—

一般の企業や組織において、面接で誰を採用するかは、企業の将来の存亡がかかってくるのである。一人の新入社員が生涯勤めて退職するまでの経費（人件費や教育費も含めて）も平均で4億円はかかると巷間（ちまたに）^{こうかん}言われている。

しかも、そのような企業にとって大きな賭けともなる採用にあたって、1回の筆記試験や数回の面接（1回の場合もある）で決めなければならないのである。このような企業にとって、重大な決断をするに当たって、その判断基準になるのはたとえ一流企業であっても学歴や能力だけではないのは当然である。

私の公務員受験校の教え子で、一流の国立大学を卒業し、一流の都市銀行の採用試験を受けて頭取の最終面接までいった学生がいた。その最終選考に残ったのは、たった2名であったが、1名は合格し、そして私の教え子は落ちたのであった。それで、残念に思ったその学生は、自分の落ちた理由を聞いたそうであるが、その理由は簡単なものであった。「君は話しすぎる」ということであった。

滔々と得意気に頭取に話した姿が思い浮かぶのであるが、何事も「過ぎたるはなお及ばざるがごとし（やり過ぎるといふのは不足しているのと変わらないという意味）」である。ここが特に学生や若い人には中々難しいところである。いくら自信を持つことが大切だからといって、能力を殊更ひけらかすのは、相手によっては傲慢な態度に見られることもある（経済界の大先輩に対して経済の知識をひけらかした態度）。

相手に応じた、又状況に応じた対応が必要であるという事である。又それができなければ、一流の銀行には就職できないであろう。

いずれにせよ、面接を受ける人間の表情や態度そして口調などの全体的雰囲気から感じ取ることのできる誠意や熱意、そして勇気や信念が重要な要素となるのである。それは受験者の会社に賭ける決意と覚悟になって現れてくるものでもある。

特に企業がどのような人物を求めているかは、以上の事柄だけでも判断できるであろう。企業の発展のために、全身全霊を捧げてくれる人物であることが先ず大前提である。

そのためには、当然のことながら、前述したように受験者の会社に賭ける決意と覚悟である。又、仕事への意欲である。面接官は、これをあらゆる角度から確認するのである。

企業の寿命は平均で 30 年といわれている。経済における景気変動は誠に予測しがたいものがあるのであるが、一流企業として華々しい発展を見た企業であっても、永遠に繁栄を続けるとは限らないのである。

昔から、「売り家と^{からよう}唐様で書く 3 代目」と言われているように、例え繁栄した企業でも世襲で 3 代続くのは難しいのである。又、現代のようにグローバル化した経済では、少しの為替レートの変動や他国の経済停滞でも企業にとっては、大きな影響を受ける時代である。

資本主義・自由主義の市場経済の下では、市場でたとえ先行企業が利益を上げて、必ずその産業に新規参入が起こり、激越な競争が展開されるのである。一日たりといえども気を許すことができない厳しい戦いが行われているのが、企業の置かれている社会である。経営責任者はまさに、常に暴風や荒波をくぐって舵取りをしていかなければならないのが現状である。一步舵取りを誤れば、いつ転覆してもおかしくはないのが現実の社会である。ところで、そのような経済状況の中で、大部分の企業は、毎年多くの新卒者を採用しているのであるが、経験豊富な年配の従業員を退職させ、経費をかけてゼロから教育研修を行ってでも新卒の若い社員を採用するのはなぜであろうか。

いかなる企業の成功事例でも経営環境の変化で、従来の成功法則が通用しなくなるのが現実の経済である。現在成功している段階で、その成功法則を捨てて、次なる法則を模索しなければならないのが、この生きた経済の姿である。経済学者のシュンペーターはこれを「創造的破壊」と名付けた。いかなる企業といえども、生き残りのために日々革新と創造を繰り返していかなければならないのである。

そのために従業員に求められるのは、いかなる環境の変化にも対応できる柔軟性（柔軟な思考）である。成功法則の先入観から離れられない硬直した思考では、対応できないのである。そういう点で、若者は、ゼロから出発するため既成概念に捉われないという性質を持っていることで、企業は毎年新卒者を採用することになるのである。

しかし若いというだけではもちろん通用しないのである。先入観や偏見に捉われず、何が業績の悪化をもたらしたのか、問題点を冷静客観的に見極める能力を発達させる柔軟性を持ち、それだけでなく計画性を伴う改善案を策定する能力も、又その計画を積極的に推進していく情熱と実行力を併せ持つものならば、年配の経験者でもおおいに良いのである。しかしこれも会社に全身全霊捧げる気持ちの者でないとできないことである。ただ、そのような精神は年配の経験者よりも若い未経験のものの方が期待できるというだけである。

それに加えて若い人に責任を担ってもらって成長してもらわなければ、その企業のみならず、国家社会そして人類の発展もないからである。経験者の命は有限だが、企業や産業は生き続けなければならないのである。いつまでも年配の経験者だけでは、経済産業の永続的な発展はないのである。ここに、企業にとっても社会にとっても若い人の育成が必要であり、又大学や専門学校までの教育が必要なのである。人間社会は仕事によってのみ存続しそして発展していくのである。そして、その仕事によって人間自身の成長も発達も可能となるのである。

そういう意味では仕事を抜きにして、人生の意義も価値もないのである。又、仕事こそ人類

社会が成長発展するための要であり土台となるものである。人間の実人生は仕事を通じて展開していくものであり、仕事を離れて人間の生存もなく社会もなくそして人生の悟り（人生や世界および宇宙などの存在への認識）もない。

仕事は企業にとっても社会にとっても、その存続と発展のためにはなくてはならないものである。企業が学生に求めるものに、「会社にかける決意・覚悟」「積極性」「熱意」「課題設定能力」「計画性」「実行力」などが挙げられているのも、そういう理由からである。まさに企業のみならず人類社会の存亡にも係ってくるからである。

特に最初の「会社に賭ける決意と覚悟」は最も会社にとっては重要な点である。仕事に命をかけるといっては大げさのようだが、少なくとも企業の経営者は命を賭けているといっても過言ではないのである。特に中小企業の経営者の場合、銀行から融資を受けているケースがほとんどだが、自分の家屋敷を担保にしている方がほとんどである。事業に失敗すれば、まさに首を括らねばならないのである。事業を維持し発展させていくという事は、それ程厳しいことなのである。これは当然、代表だけでなく管理職や役員になる人にも求められる姿勢である。

しかし、最初から管理職の人はいないので、経営者と一体となって責任を負うような人物は、やはり、いろいろと紆余曲折を経ながらも仕事に命を捧げてきたことには間違いのないであろう。

この最初の仕事に対する命がけの姿勢があれば、次の「積極性」も「熱意」も、そして「責任感」も出てくるものである。何事も最初にかに強い思いを抱くかという事が大切である。しかしこの一番大切な命がけの姿勢は、仕事を生活の資を稼ぐだけのモチベーションからでは到底生まれてくるものではないのである。

仕事は、自分が働いている企業にとってのみプラスをもたらすものではない。人類社会は分業によって成り立っており、それによって人類社会の発展と進歩がもたらされている以上、仕事はどのような仕事であれ、必ず人類社会のお役に立っているのである。それ故、先ずは仕事を通じて社会に奉仕する覚悟と決意が重要である。そのような覚悟と決意があれば、会社が困難な状況に立ち到ったとき、たとえ会社での就業年数は短くても、又重役でなくても、これを、自らの責任として受け止め、自分の与えられた場を基盤にして、自分なりにその困難に立ち至った原因を分析し、積極的に改善計画案を提言していくこともできるであろう。そして、熱意を持って最後までやり抜くこともできるであろう。ひとえに、仕事に賭ける「覚悟」と「決意」の問題である。

京都セラミックの稲盛会長（第2電電の創業者でもある）は、人生及び仕事の結果というものは次の公式で決まると彼のあらゆる著書の中で述べている。すなわち、「考え方×熱意×能力」という公式である。考え方というのは、人生及び仕事に対する考え方のことで、これは人生及び仕事に対する姿勢と言い換えても良いかと思う。

この公式から分かるように、いくら能力があっても、考え方や熱意がゼロであれば、仕事の結果も全く何の成果ももたらさないということである。逆にたとえ、能力が他の同僚たちに劣ったとしても、仕事に対する命がけの姿勢や熱意が大きければ、その仕事の結果も実に大きいものとなるということである。

この内容には付け加えることがある。多くの成功者が言っていることだが、熱意を持って仕事に取り組んでいると、それに関する知識が豊富になるだけでなく、能力自体も向上してくるということである。努力と訓練で能力は高まるのである。逆に人間は努力と訓練がなければ、最初にかに能力がある人物でも、その能力は低下していくものであることは、学校の勉強のみ

ならず既にあらゆる分野で証明済みである。

ちなみに、稲盛会長は、この「熱意」と「能力」は0点から100点としているが、最初の「考え方」は、マイナス100点からプラス100点までとしているのが重要である。つまり、他の2つがプラスでも、仕事及び人生に対する姿勢（考え方）がマイナスであれば仕事の結果はマイナスになるということである。

これは、能力があり熱意を持って仕事をして、その仕事に対する考え方、つまり、自分の出世だけや利己的目的を達成するために、仕事をその手段にしているようでは、その人生及び仕事に対する姿勢に問題があるので、仕事の成果はマイナスとなるのである。

仕事に命を賭けるといえるのは、そういう自分だけの出世心や名誉心そしてただ金持ちになって豪華な家や車を持ちたいなどの考え方から出てくるのではない。今まで論述してきたように、人類社会は原始時代からますます発展し高度化・専門化・細分化していく中で、仕事そのものが真や善やそして美を追求するところまで高まってきているのである。もちろん古代においてもそれは既に実現しているものも多い。ただの生活のためだけの仕事ではなくなっているのである。

そこには、社会貢献と自己実現が存在するのである。そしてまた、共存共栄の中で自他共に発展していく心がけが要請されているのである（本学の建学の精神では「己を空しくして社会に奉仕する人間」と表現している）。

そのためにも、稲盛会長自身の体験からいうと、天職としての仕事を求めるのではなく、与えられた仕事を天職として全力で取り組む姿勢が重要である。ここからのみ仕事に命を賭ける姿勢が生まれてくるのである。

人類社会の発展の中で、仕事とはそもそも何であるか。人間は何のために仕事をし、どのような気持ち・心がけで仕事に取り組まねばならないのか、ということ人間は真摯に考えなければならないのである。それはまさに、仕事を通じた人類社会及び人生哲学を考えることである。

正しい人生観と仕事観、そしてそれに基く仕事に対する姿勢と心がけが、個人の人生のみならず、その会社の発展ひいては社会に対する貢献へとつながっていくのである。仕事を誠実に言うだけでも、立派な社会貢献であるが、更に人類社会に貢献し奉仕する気持ちで仕事を行うことは、仕事への完成度を高めそして仕事から得られる充実感を増すことになるであろう。それは、自己実現と社会の発展の同時達成である。

企業がどういう人物を採用したいのか理解できたであろうか。企業が求める人物は同時に社会が求める人物である。それが理解できたのであれば、企業が面接試験で、受験者の何を見ようとしているのかが、おのずと分かってくるであろう。面接官はいろいろな質問を通じて、受験者の仕事に対する姿勢や考え方を見抜こうとしているのである。又、受験者の会社に対する情熱が本物かどうかという事を見たいのである。

そういう意味では、面接試験は企業にとっても受験者にとっても真剣勝負の場である。その真剣勝負は、ペーパーテストのそれではなく、自分の人生観・仕事観に基く姿勢や覚悟を含めた人物そのものを見てもらうという勝負であり、又見抜こうという勝負である。

面接試験の手引書で単なる面接用の模範解答やマナーを練習すればよいというものではないという事が理解してもらえたと思う。又、安易に合格者の真似をすれば自分も合格するものではないという事である。ただし、面接試験の際の入退出のマナーや挨拶の仕方・言葉使い等の

面接のマナー自体はスポーツでいうルールのようなものである。スポーツでルールを知らなければ試合はできないように、面接試験で面接の基本マナーを知らないでは、面接での本当の勝負はできない。ルールを知らないで試合に臨めば試合どころか、即退場になるであろう。それと同様に面接のマナーも知らないで面接に望めば本番の勝負に臨む前に失格となるのは当然である。

ところで、企業が求める人物像には大切なものがもう一つある。企業は当然であるが組織である。その組織には多くの従業員が仕事を行っている場である。大きな組織になればなるほど、従業員の役割分担は細分化・専門化していき複雑なものとなっていくのである。しかし、いずれにしても、役割分担を異にしながらも、同じ部署には上司もいれば同僚もいるそして部下もいる。

仕事の内容は異なっている場合もあるし、同じ作業を何人かで分担して行うこともあるが、組織はラインとスタッフというものに大きく分かれている。ラインは企業の代表をトップとして次に管理職と中堅幹部そして平社員というヒエラルヒー（ピラミッド型の階層組織）となっているのが一般的である。

スタッフは、ライン組織の中に含まれないトップに直接に専門的な助言などを行っている部署もしくは人物である。

特にライン組織の中で仕事を行う場合、必ず指示命令系統が明確になっており、トップダウン方式（上層部の決定で経営戦略や職務上の役割がラインを通じて末端まで伝えられて職務が遂行されていく方式）が一般的である。ここには、上司の指示命令が行われ、その職務遂行にあたり、結果を上司に報告・相談するという工程が通常行われている。

部署ごとにその責任者が部下に仕事を指示する場合もある。その場合も同様であるが、部下は基本的には上司の指示に従って、分からない場合は相談しながら又指示を仰ぎながら、仕事を遂行していかなければならない（時には、部下が上司に仕事上の提言を行うことも当然あるし、前述したように敢えて会社のために提言しなければならないこともある）。

このような組織の中では、若い従業員には何が求められるかである。昨今「コミュニケーション能力」と一般的に呼ばれているものがそれである。

しかし、この言葉は少し説明を要する。「コミュニケーション能力」とは、会社における人間関係を良好に築いていくことによって、仕事を円滑に進めていける能力とされているものであるが、このような定義では抽象的過ぎて、特に会社という未知の世界に対して、学生には分かりにくい内容であると思われる。

会社では当然チームで相談しながら協力して仕事を進めていかなければならないことも多くある。又たとえ、自分ひとりの仕事であっても各部署と相談したりしながら協力してやっていくのがほとんどである。そこでは、基本的に会社の一つの共通の目的に向かって全員が協力して仕事を行っているのであるという認識がなければならないのである。お互いを理解しそして尊重して仕事をしていく姿勢が必要となる。

しかし、この当たり前のような姿勢と思われるが、これが意外に難しいのである。多くの企業がこの「コミュニケーション能力」を新入社員に持ってもらいたい性質の第1番にあげているのは、逆に言えば、それだけ大切なものであるにも拘らず、実行するのが中々難しいことを表明しているとも言えるのである。

通常、会社において一般的な人間関係であれば、余程のことがないかぎり、円滑とまでは言

えないにしても、ある程度の人間関係は築けると思うのである。

しかし、こと仕事上のこととなると、ことは、そうた易くはないのである。やはり、自分の考えや思いというものがある。それが強ければ強いほど、妥協したり落とし所を探ったり、相手の顔を立てたりするのが難しくなるのである。それで、わが国でも昔から事前の“根回し”というものが組織では当たり前になっているほどである。

主張すべきは主張し、聞くべきは聞き、又認めるべきは認め、説得すべきは説得しながらまどめていかなければならないのである。そうしないと、ことは進んでいかないからである。

グループディスカッションやグループワーク面接等では、そういう意味での「コミュニケーション能力」を見る場でもある。

しかし、企業や組織にとって人間関係とは勿論それだけではない。一番の問題は上司や先輩に対する部下として又後輩としての対応である。

すべての上司や先輩が、温かい目で見守ってくれながら指導してくれるとは限らない。中には、頭ごなしに怒る上司もいるであろうし、又嫌味な言動を繰り返す場合も多いであろう。面倒見の良い先輩もいるであろうが、意地悪をする先輩もいる。部下の言う事をあまり聞かない上司もいる。

立場上、部下は中々反論したり口答えしたりできるものではないのである。喧嘩したら終わりだという観念が強いからである。

また、自分のしたい仕事を指示されるとは限らないし、むしろ逆の場合の方が多いのが現実である。

さあ、皆さんはこのような一見理不尽と見られる状況を前にした場合どうするであろうか。怒りと不満で仕事のやる気をなくしてしまうであろうか。

実は、企業としては、いかなる上司や先輩に対しても新入社員や部下の人に望んでいることがあるのである。企業にとっても、あらゆる部門で理想的な人間関係が構築されている等という幻想を持っている管理職はほとんどいないといってよいであろう。むしろ管理職になっている人ほど、あらゆる人間関係を体験し、又厳しい責任を自ら引き受け、そしてそれを乗り越えてきているといっても過言でないであろう。人生のそして仕事上の酸いも甘いも噛み分けてきた人達である。

そういう人達が面接を行うのである。自分たちが体験してきた中で、何が大切かを十分判っているのである。その彼らが学生に求めるのは、当然あらゆる困難と、またそれが仕事内容であれ人間関係であれ、自分にとって厳しい環境をプラスに受け止め、むしろ、その厳しさに対して、自らを鍛えてくれる砥石として感謝して受ける姿勢である。

現代医学において革命的なストレス学説を展開して、わが国における精神身体医学を発展させたハンス・セリエ博士の「現代社会とストレス」の著書の第 20 章の「感謝の哲学」の中で、人間は他人の感謝を十分に得ることに励まされて働くのではないであろうかと述べている。この感謝の心の仕事上の意義については、別の論文で論述する予定である。

いずれにしても、あらゆる体験を勉強と思って受け止めることのできる人間である。良い見本であれ悪い見本であれ、これをすべて自分の肥やしにしていける心の広い柔軟性のある人間である。

厳しいつらい体験に対しては、すぐストレスに感じ、暗く打ち沈んで再び起き上がってこない人間を企業は求めてはいないのである。これは、人間関係だけではない。仕事上の失敗をし

たときでも、又過重な責任や仕事を与えられた場合でもそうである。

そのために面接官は、受験者の仕事にける強い思いや覚悟を確認することになるのである。各企業が何よりも志望動機を重視するのもそのためである。仕事に対する覚悟の程を確認するために、残業に対する考えを聞くかもしれない。又志望動機の矛盾点を突いてくるかもしれない。いかなる厳しい状況や環境にも耐えて、これを乗り越えていく精神力を持つ人物であるかどうかを確認したいのである。

企業は、ただ単に人と仲良くしていけるお友達感覚の優しい人物を求めているのではない。たとえ意見が違っても仲間を同士として尊重して協力していける人間、またどのような上司や先輩からでも、その一見厳しいと思われる経験からでも自らの栄養分として吸収していける前向きな人物を求めているのである。

分かりやすく言えば、どういう場面であれ、どういう人に対しても尊重し感謝しながら仕事のできる能力、それは言い換えれば「包容力」といっても良いと思うが、その人間力を真の意味での「コミュニケーション能力」と考えて良いかと思う。

そういう意味では、卑屈さや自信のない言動や逆に銜い（自分を実力以上に飾る態度・心持ち）も面接官の心象を悪くするであろう。そういう人物は逆境をバネにできないし、真の意味での協調もできないからである。

しかし人間の思いや考え方というものは、良きにせ悪しきにせよ一朝一夕に形成されてきたわけではない。日頃の継続された思いや考え方の習慣（特に人や物事に対する捉え方や受け方そしてそれに基いて形成された人間観・職業観）が人間の潜在意識の中に蓄積され無意識の言動や雰囲気となって表面化してくるのである。

そこで、今から受験者の面接時の心構えに入るが、この心構えは付け焼刃で、又いい加減な思いでは身に付くものでないことは理解してもらえと思う。小手先の対応で突破できると思って面接試験に臨むのは、あまりにも無謀で怖いもの知らずと行って良いであろう。しかし、だからといっていたずらに恐れる必要もない。

面接官がどのようなことを聞いてくるのかという内容を知ってその小手先の個別対応の模範解答を覚えるより、本質的に面接官は一体何を受験者に求めるものなのか、受験生の何を確認したいのかという面接官という者の共通の本心を知ることが重要なのである。

先ず、相手（敵）を知りそして己を知る。これが百戦危うからず（百回戦っても必ず勝つ）の孫子（古代中国の兵法家）の兵法の極意でもある。

③面接における心構え

面接官は受験者の何を知りたいのかという面接官の本心を理解すれば、受験者はどういう心構えで面接試験に臨めばよいのかということが、おのずと理解することができるであろう。

その会社での働く姿勢というものが最も重要であるという事は既に理解できたであろう。面接時の基本的なマナー・ルールは別として、面接試験に臨む心がけにおいては小手先の技巧では通用しないのである。

先ずは、何よりも仕事に向かう決意と覚悟である。仕事そのものに賭ける思いである。仕事に対する心構えこそが、面接時における心構えにならなければならないのである。合格するための面接試験だけの対応で、たとえ採用されたとしても、実際の仕事に臨んで良い成果をあげることは難しいものがある。また、仕事において高く評価されることはないであろう。

ただ、高い給料を得て、いずれは出世して、豊かで安心な生活を送りたいというのでは、最初に論述したように、そもそも仕事に対する心構えになっていないのである。企業は常に生きて動いているのである。厳しい戦いに勝ち抜いていかなければならないのである。安穩としていてはたとえ大企業でも存続できないのである。

そのような生き残りをかけた企業社会の中で、自分の高給と出世を求めて企業で仕事をしようとするのは、自分が会社に奉仕するのではなく逆に自分の目的に会社を奉仕させることになるのである。まさに、本末転倒である。

仕事とはそもそもその漢字の意味から言うと、「仕」も「事」も“つかえる”と読み、仕（事）えるとは、神や人に仕（事）えることである。ところで、「仕える（事える）」とは、奉仕するという意味でもある。奉仕とは無私無欲の純粋な心で対象となるものに捧げ尽くすことである。

仕事とは、その本来の意味からいっても、企業や組織に、又自分に与えられた職務・役割に命を捧げつくすという意味になるのである。

たとえ好きな仕事であっても、少しでも手を抜くと、いい仕事ができないだけでなく、仕事から得られる充実感も少ないであろう。

人間は人生の大半を仕事に費やしているのも、その仕事から真の充実感を得られない限り、人生そのものの充実感も得られないであろう。だから仕事は命なのである。仕事に命を捧げることで、命そのものが充実してくるのである。命が充実してくるという事は、そこから必要な積極性や熱意も、そして工夫や改善策も出てくるのである。汲めば汲むほど地下水の水が湧き出てくるようなものである。

人間の知恵や勇気や愛そして能力も、汲めども尽きぬ人間の生命の本源とつながっているので、最初に仕事に命を捧げる決意と覚悟で臨むことが、仕事にとって必要なもの、即ち勇気も知恵もそして愛もその生命の本源から汲みだされて来るのである。

そして、それが仕事においてすべてを決することになるのである。これは、前述した京セラの稲盛会長の仕事の成果方式の「考え方×情熱×能力」の考え方と情熱に当たる。

また、「天は自ら助くる者を助くる」と言う箴言があります。仕事に命を捧げる覚悟と自ら惜しみなく努力を捧げることによって、必ず問題は解決し、困難は乗り越えられるという言葉である。

面接で、小手先の模範解答や技巧を弄しても何の意味もないのである。面接官は受験者の本当の姿・本当の決意そして誠意や熱意を知りたいのである。そのためには、仕事そのものに対する正しい認識を先ず持たねばならない。その上で日頃から仕事について真摯に考え、専門的な実力を培い、そして人間を磨く努力していくことが大切なのである。

④面接は礼に始まって礼に終わる

最後に面接には、更にもう一つ重要なことが含まれている。面接試験のマニュアル本には、どの本にも詳しく出ているが、その中で、特に礼についてである。マニュアル本には、お辞儀をする場面やお辞儀の角度までが書かれているが、その礼に関して、それらマニュアル本には全く書かれていないことがある。

それは礼の心である。礼は、誰でも当たり前のように行っている日常の作法であるが、その礼がどのような意味を持っているのかということを理解している人は少ないと思われる。

しかし、この礼というものが実は、面接でも重要な意義を持っているのである。ただ、形だ

け 15 度傾けて礼をすればよいというものではないのである。もちろん頭をちょこんと下げるようなお辞儀ではだめである。これは面接以前の段階で失格である。

相撲でも又剣道や柔道でもそうであるが、わが国の武道では、試合前に双方礼をしてから始めるのである。そして勝負が終わったらどちらが勝っても負けても、双方丁重に礼をして終わるのである。“武道は礼に始まって礼に終わる”と言うが、これは、わが国独特の武道の作法でもある。また武道の精神でもある。

他の格闘技は、礼で始まることもなければ、礼で終わることもない競技が大半である。ときには試合前に、にらみ合ったり、わが国の柔道家でも試合に勝ったときガッツポーズをした選手がいたが、日本柔道協会から厳重な注意を受けその後改めたようである。

日本の本来の武道では、試合後の姿だけを見たらどちらが勝者か敗者か分からないのである。本来相手を倒すための武術が、わが国では人の修行の道として高められていき、そして遂に武道となったのである。

そもそも武の道とは古代から日本人が生活の中に実践してきた哲学である「^{かん}神ながらの道（神の御心のままに生きる事で人格を完成させていく道）」から来たものである。それは、武の修行を通して人間として完成することを目的としているのである。だから「道」となるのである。「道」とは勿論道路の道ではない。語源は「満ちる」からきており、「完成」の意味である。

武道において、相手はただの敵ではなく己を磨く対象となるのである。「葉隠」武士道（佐賀鍋島藩における武士道の精神で山本常朝の作）では「武士道とは死ぬことと見つけたり」で始まるのであるが、死ぬとはただの肉体の死を意味するだけでなく己の自我（功名心や驕りそして死を前にして逃げるような卑怯な心など）を捨てる事を意味している。

本来殺人剣であったものを、人間修行の道にまで高め上げ、剣の道を通して悟りを開く道としたのである。それ故「剣禅一如（剣による修行と禅における悟りに到る修行は一致するという意味）」とも言われているのである。江戸時代の沢庵和尚の「不動知神妙録」がその代表的著作である。

そういう意味では「茶道」も「華道」も同様である。

お茶の作法や生け花の作法を通して神の道・人の道につながらなければならないとするのである。茶道は調和をもたらず行き届いた心使いを最も重んじているのである。それ故、茶道は「^{わけいじやくじょう}和敬寂静（行き届いた作法を通して、茶を入れる相手を尊敬しその調和的雰囲気の中で生まれる静かにして自然と一体になった浄土にいるような無我の心境）」をその精神的到達目標としているのである。それ故茶道においても同様に「^{ちやぜんいちにょ}茶禅一如（茶の道と禅の教えによって悟りを開くこととは同じであるという意味）」とも言われるのである。これも、ただのお茶を飲むことから、人間修行の道にまで高め上げたものである。

それゆえ武道においても茶道や華道においても「礼に始まり礼に終わる」のである。礼の奥義は相手を尊敬し、そして拝むことである。お互いに尊重しあう道なのである。それが日本の「^{かんながら}随神の道（神の御心のままに歩む道）」である。古来からわが国は礼儀を重んじる国と言われてきた所以である。

通常的生活の中における礼も、本来はそういう「相互礼拝の心」から行ってきたのがわが国の歴史である。面接というものは武道における真剣勝負と似たところがある。面接は人生における最初の真剣勝負の場であり、そして仕事場は神聖な道場といえる。

そういう意味では学生が学んでいる教室も神聖な道場といえよう。相撲で塩をまき土俵を清

めるのは典型的な例といえる。そこが真剣勝負の場であり、礼で始まり礼で終わる神聖な場だからである。そこから相撲道も生まれてきたのは当然である。

「面接は礼に始まって礼に終わる」という事が理解できたであろうか。日ごろ培った実力に裏付けられた自信を持って面接のドアを開けよう。そして、日常的に相互礼拝の心で行ってきた礼の心が、そのまま自然に出るように。

礼一つにしても日ごろの心がけが最も大切である。そして構えることなく力むことなく“そのままの心”で面接に臨まなければならない。

この“そのままの心”で臨む事ができるためには、やはり、日ごろからの心がけが重要である。どんなときでも“そのままの心”でいる練習が必要である。そのためには、日々全力で取り組んでいること。そして何事にも感謝する心と常に他を尊重するという心持が何よりも肝要である。それが神ながらの道でもある。

古代中国の老子の哲学（道教）ではこのそのままの心を「無為自然」と言っている。何事も計らわずに（このように言ったら変に思われないか、またこのように言ったら高く評価されるのではないか等と思いつくのではなくて、ただ私心を捨てて誠意をもって何事にも臨むこと）自然そのままの心で生きる事を重視しているのである。古今東西、人間にとって大切な事は同じである。

3. 社会の形成と発展の中で仕事を考える

—人間は個的存在であると同時に社会的存在である—

さてそこで、この人類及び社会の発展の中で、改めて仕事というものがどのように形成されてきたのか、その中で仕事の意義と価値をどのように考えるか、次に見ていきたい。

①法と民主主義の成立

人間は基本的に集団生活の中でお互いに協力もし、又、お互いの私利私欲から争いもしてきた存在である。他部族との水争いや他部族を侵略してこれを支配下に置き、民族によっては征服された部族を奴隷にしてきたこともある。この小部族の集団がより大きな地域の集団となる中で、民族間や国家間でも同様なことが繰り返されたのは古今東西の歴史が教えるところである。

まさに人類の歴史は、共同と戦争の歴史と言っても過言ではない。特に、共同作業によって集団の生活及び安全を維持し、そして何よりも同一部族間にも生じる争いを収めて部族が平和で暮らすためには、そこに当然、共通のルールが必要となる。

この人間生活を安全に平和に維持しながら、集団が大きくなるにつれて社会そして国家が成立してきたのである。特に共同の社会生活維持のための共通のルールが、最初は古代における小集団の掟のようなものから、近現代にいたるまでに明文化された法律というものに順次発展整備されてきたのである。

現代においては、国家間の戦争を防ぐために、世界中の国家の加盟した国際連合という組織があり、また国際法という各国家を一定の秩序の下に置く法律も整備されてきている。

そこで、現代においては、その一定の秩序を維持する法というものによって国家社会及び世界を平和で安全なものにすることを「法の支配」と言い、又その法によって治める国家を「法

治国家」と呼んでいる。

各自がその法を遵守し、その法律によって秩序正しく整然と治められている国家ほど、その国民の規範意識が高い国家と言える。一定のルールを守り、秩序を維持できるということはそれだけで国民の生産性も高まるのである。社会の秩序は経済発展の大前提となるものだからである。

国家権力からの開放の自由から始まった民主主義の思想は、法の成立と相俟って順次近代国家の政治基盤となっていた。国家社会が拡大し、経済社会も複雑化・専門化すればするほど、一人の人間が独裁的に治めるには限界が生じてきた。

国民の代表が議会を開設し民意を代弁し（代議制・間接民主主義）、その議会で国民統治のための法を成立させ行政機関がその法を執行することで、社会国家を治める仕組みである。たとえ、一国のリーダーといえども民主主義と法のルールに従わなければならないのである。もし、国家における行政的取り組みを変えるためには、民主主義のルールに従って、議会で法自体を変えなければならないのである。

それが、拡大化し複雑化・専門化・高度化した現代社会における法治主義の理念であり、人類共通の統治理念である。

②経済社会の発展と分業の成立

人類の進歩は、人間の共同生活の進展と共にもたらされてきている。農耕生活においても、又狩猟生活においても道具は必要で、年月と共にその道具は改善を重ねてきた。最初は生活の糧を得る（食を得る）ことが仕事の目的であり、そのための手段として道具が使用されていたのであるが、その道具が順次改善され、高度に発達するに及んで、より便利な道具をつくるための職人が現れ、その道具自体を作ることが職業として成立していったのである。ここに人間の社会の成立と発達の中で経済的な分業というものが成立してきた過程がある。

この道具の発達は、人類の社会が発展拡大すればするほど、より高度の技術の発達をもたらし、科学の発達と相俟って、独立の産業として成立してきたのである。工作機械やロボット産業そしてコンピュータを中心とする情報産業である。現代は、その経済的職業的分業がより細分化し高度化・専門化していっていると言える。

これは、道具だけに限らず、人間の社会がより広域化・拡大化するに及んで、生活のあり方も相互の交流の中で、高度化していったのである。即ち、近場同士の物々交換から、市場というものが発達していったのであるが、遠方同士の交換はあまりにも非効率的であり不便であるため、交換手段としての貨幣というものが考案されたのである。ここから貨幣経済というものが始まったのである。

この貨幣というものも、近代において経済社会が益々広域化するに及んで、貨幣そのものの円滑な流通のための専門的な職業が成立していったのである。これが金融業の始まりである。

金融業がより発達していった理由の一つに、交換の手段であった貨幣が、その貨幣自体を蓄積することを目的とし出した人間が多く現れたことがいえる。

貨幣は経済の発達のために交換手段として使用されなければならないにもかかわらず、それを蓄蔵することで、市場において交換が滞ることになり、商品を製造しても売れないという事になってきたのである。

これによって経済の沈滞と閉塞が生じ不景気となっていたのである。この現象を経済学で

は、「合成の誤謬」(多くの人が豊かになるために貨幣を蓄積・退蔵すればするほど経済は沈滞し、その結果世の中全体の不景気が結果的に自分の所得そのものの低下をもたらしていく逆転現象を表す経済学用語)をと名付けた。

そこで、その蓄積されがちな貨幣を一時的に預かり、逆に借金してでも事業を発展拡大する経営者に事業資金として、その貨幣を提供(融資)する専門の職業が成立してきたのである。それが金融業であり、その取引される場を金融市場と呼んでいる。ここにも、経済的分業の一つの形態があり、その金融業が中心となって金融資本主義を成立させたのである。

もちろん現代では、世界の国々の間に貿易というものが成立しており、その貿易の決済のために為替市場というものも成立している。

いずれにしても、社会の拡大は、経済的分業を推し進め、その結果多くの職業が成立していったのである。

それは法の世界でも同様である。法自体も複雑化・高度化・専門化するに及んで、その法そのものを専門とする職業も成立してきたのである。これが弁護士や裁判官などの法律家というものであり、これもまさしく分業である。又その法と政治の分野においても、法の作成(国会)・法の執行(行政)・法の番人(裁判所)として相互の抑制と均衡によって法社会を維持するために「三権分立」が成立しているのであるが、これも法と政治の世界における分業である。

社会は高度化すればするほど職業は増加していくのである。それは分業が進むからである。そしてその職業はより細分化・専門化していくのである。特に技術の世界は化学の発展と相俟ってますます細分化・専門化していつている。

③職業としての政治及び行政の成立と発展

経済社会の成立と発展は、高度な産業間の分業を生み出しただけではなく、人間の経済社会を安定させ、外敵から集団を守り平和を維持するためのリーダーの存在が、後に職業としての政治家の出現を必然的に生み出していったのである。そして膨大な法の整備と執行のための行政の組織も同時に必要となり、職業としての行政官僚(公務員)という存在も生み出されていったのである。

ここにも政治と行政という独立の人間社会における専門的分業世界が成立していった経緯がある。

更に又その行政も各省庁として専門分化していつているのである。行政の分業である。そして現代においては、学問・教育の世界でも細分化と専門化が進み、幼児から大学まで縦の分業が学制として成立している。又横の分業も細分化・専門化が進み、科目ごとの教育指導が行われている。

④現代におけるキャリア教育の意義

以上見てきたような人間社会が発展していく中で、職業も無限に増加しつつあり、あらゆる分野において極めて細分化した分業と専門化が成立してきており、先述したように、各自の職業選択や仕事の意義が極めて捉えにくい時代になってきたといってもよい状況である。

そのような状況の中で仕事・職業を考えるのは極めて難しいことではあるが、教育の世界でも現実の仕事と学校での勉強とを結びつける糸がますます離れていつているといつてもよい。

ここに、現代社会におけるキャリア教育の必要性が生じてきたのであるが、しかし、現実の

学校において、どれだけ職業意識形成につながるキャリア教育ができているかということになると、疑問である。

以前のように小・中学校で、家庭科や技術を教えたり、職場体験を少ししたところで、明確な職業意識が育つほど現代における産業社会は単純ではない。

しかし、そのような複雑化・専門化・細分化した経済社会で、仕事そのものも専門化・細分化していつているが、その仕事の成立の課程を理解することで、仕事の本質も理解できるであろう。

なぜ仕事は細分化し、専門化し、そして高度化していつているのか。なぜ人類社会は、科学技術も政治も経済もますます分業化が進み、途絶えることなく進歩発展を続けているのか。

人類の生活は衣食住の確保から、順次仕事の細分化と専門化を続けながら、生活の高度化と社会の拡大そして統合を続けてきた。その人類の発展の中から種々の文化も生まれそして開花してきた。人類の生活が国によって差があるが、徐々に高度になってきているのは事実である。

この人類の発展の過程を見るにつけ、動物とは根本的に異なるところの人類に内在するある共通の精神が存在する。それは、この論文の最初にも触れたが、それは、進歩発展を目指す向上心であり、真や美を追求する心である。そのような精神が人類社会の発展を促し続けているのである。

この精神は人類が共有しているものである。人間は本来そのような向上心や真・善・美を追求する純粋なる精神が宿っているのである。このような人間に内在する共通の精神をいかに引き出すかということに教育の使命がある。

仕事は、そのような人間に内在する本性（向上心や真善美を求める心）の表現であり、手段である。かくして、人間は仕事を通じて崇高なものを表現していくものとなるのである。そしてその結果、人類社会の向上・進歩・発展に貢献していくものとなる。

それ故、問題は、どのような心がけで仕事に向かうかである。ただの生活のためだけ仕事をするとするような心では、人類社会の発展に貢献することはできない。また、仕事から得られる精神的満足感も少ないであろう。

ここに、人間は単に個人として存在しているだけでなく、人類社会の必然的発展という目に見えぬ宇宙の意思ともいべき人類的要請の中で生きている社会的存在であるということが理解できるはずである。人間はこの宇宙的意志に則って人類の遺産を継承しつつ発展させていく使命があるといえるのである。

いずれにせよ、どのような仕事であれ、この自分の仕事を通して人類社会の発展に貢献し、奉仕するのであるという心がけで行わなければならないものなのである。これがキャリア形成の始めであり、そして終わりである。

4. 仕事の意義と価値について

—仕事を通して何を学び・何を実現するのか—

「生活の（賃金を得る）手段としての仕事」と「人類に奉仕し自己の魂を向上せしめる仕事」との違いは何であろうか。その答えを、先人達自身が語った言葉で改めて考えていくことにしよう。

「私達は皆、生きるため、そして家族を養うため、お金を稼がなくてはなりません。しかし、も

し働く必要がないほど金持ちに生まれたとしたらどうでしょうか。時折、のんびりした時間を過ごすのは楽しいものですが、もし毎日を無駄に過ごしていれば、いずれは耐え難いほど退屈してしまうでしょう。働くことには、給料をもらう以上の何かがあるのです。」(稲盛和夫「成功への情熱より抜粋」)

稲盛和夫氏は京都セラミックの創業者にして、通信業界において NTT 独占を打ち破るために第二電電 (KDDI) を立ち上げた革命的・創造的経営者である。

仕事は、生計を成り立てるためだけのものではないという事が最も重要である。仕事には人生にとって、それ以上の価値と意義があるのである。それが何なのか。それを知ることが、キャリア形成の中心をなすのである。稲盛会長は、同書で更に次のように語っている。

「私は、人間が本当に心からの喜びを得られる対象というものは、仕事の中にこそあると思っています。そういうと、仕事一筋では味気ない、人生には趣味や娯楽も必要だという反論が返ってくるでしょう。

しかし趣味や遊びの楽しさとは、仕事の充実があつてこそ味わえるもので、仕事をおろそかにして趣味や遊びの世界に喜びを見いだしたとしても、一時的には楽しいかもしれませんが、決して心からわき上がる様な喜びを味わうことはできないはずで。

もちろん仕事における喜びというのは、飴玉のように口に入れたらすぐ甘いといった単純なものではありません。労働は苦い根と甘い果実を持っているという格言のとおり、それは苦しさや辛さの中からにじみ出してくるもの、仕事の楽しさとは苦しさを越えたところに潜んでいるものなのです。

だからこそ、働くことで得られる喜びは格別であり、遊びや趣味では決して代替できません。まじめに一生懸命仕事に打ち込み、つらさや苦しみを越えて何かを成し遂げたときの達成感、それに代わる喜びはこの世にないのです。

人の営みのうち最上の喜びを与えてくれる労働において、あるいは人生の中でもっとも大きなウエイトを占める仕事において、充実感が得られない限り、他の何かで喜びを得たとしても、私たちには結局物足りなさしか残らないはずで。

また、仕事に懸命に打ち込むことがもたらす果実は、達成感ばかりではありません。それは私たちの基礎をつくり、人格を磨いていく修行の役目を果たすのです。」

仕事から得られるものは、生活の資だけではないということが理解できるであろう。それは、困難を乗り越えて目的を達成したときの達成感や充実感である。しかしこの困難を乗り越えるという事が、「言うは易く行いがたし」である。

それは何故かという、仕事において困難に面したときその仕事への情熱がないと困難を乗り越えようと思うより困難から逃れようと思うからである。特に責任をとらなければならないような事態に立ち至った場合、責任回避しようと思うからである。

仕事をただ生活のためのお金を稼ぐものだと割り切っていると、そもそも仕事への情熱は生まれてこないであろう。

この今の仕事を通じて社会にそして人類に奉仕しようと思って、より良いもの、より効率的な方法はないかという様なことを日々考え、常に仕事上の改善を心掛ける者でない限り困難を乗り越えようとする気力も生まれにくいであろう。

結局、仕事を生活の資を稼ぐためだけで行う者には、仕事から得られる本当の達成感や充実感そして喜びを味わうことはできないのである。人生の大半を占める仕事から、充実感や喜びを味わえ

ないという事は、真の人生そのものの喜びや充実感を得られないという事なのである。

人間は何のために生きているのか分からなくなるだけである。芥川賞を受賞した作家志賀直哉は、次のように語っている。

「金は食っていけばさえすればいい程度にとり、喜びを自分の仕事の中に求めるようにすべきだ。」

仕事の中にこそ真の喜びがあるという事を知っているのである。仕事を生活のためだけに行うものは、仕事に情熱を燃やすことがないから、与えられた仕事をこなすだけである。しかもできるだけ仕事量は少なく楽な仕事をしたいと思うものであるから、常に仕事を「させられる」という様な受身的になりがちである。そのとき仕事は苦痛以外の何物でもなくなるのである。

労働を苦役（強制された苦しい仕事）と考える思想は古代ギリシャ・ローマ時代からあるのであり、それは旧約聖書の中にも見られるのである。

同じく作家の曾野綾子も次のように言っている。

「すべての人生のことは『させられる』と思うから辛かったり惨めになるので、『してみよう』と思うと何でも道楽になる。」

何事も自分から積極的に前向き主体的に取り組むとき、それは、たとえ与えられたものであっても義務感から行うのでないから、困難な仕事であればあるほどその達成感が得られ、魂の底から充実感が得られるのである。それを続けていけば曾野綾子が言うように、それは確かに道楽となるであろう。仕事を道楽と化すとき、人生そのものも道楽となる。

稲盛会長が語っている中で更に重要な点がある。仕事から得られるのはその様な達成感・充実感だけではなく、人間の基礎をつくり人格を磨くという箇所である。

ところで、人間の基礎をつくるとはどういうことであろうか。人間には本来さまざまな能力が内在しているのである。物事を計画する能力・注意深く仕事をする能力・細かい点に行き届く能力・アイデアを生み出す能力・他と協力して物事を達成する能力・全体を考えて物事を推進していく能力などである。

これらはすべて、現在わが国でも又世界中でも求められている能力であり、キャリア教育で養成すべ最も大切な仕事上の能力とされている。これを経済産業省では「社会人基礎力」と言っている。

しかし、このようなさまざまな能力は、当然一朝一夕に養われるものではない。日々与えられたものに対して前向きに全力を尽くして取り組んでいく中でのみ養われるものである。それは、学生時代でも又社会人となっても同じである。

それが仕事上のことであれ、又学習上のことであれ、自分に与えられたものに最善を尽くしていく中で、人間に内在するさまざまな能力が培われ養われ、そして発現していくのである。

それが人間の基礎力であり、その基礎力の上に更なる必要な能力が引き出されていくのである。能力は決して生まれつきだけのものではないのである。個人差はあると思うが、生まれつきの能力だけで通用するのは、私が塾や高校そして大学や専門学校で、小学生から大学生まで教えた経験から言うと、一般的には小学生前後までである。

昔から、「五つ神童、十で天才、二十歳過ぎればただの人」と言われているが、幼少時から神童とか天才と言われ続けて来た者は、どうしてもその才に驕って努力を怠りがちとなるので、成人するまでその天賦の才能は持たないのである。最後は努力したものが、その人間に内在する能力を発達させていくのである。勿論、天才と言われる人が、更に努力を続ければ更なる能力が引き出されるのは当然である。

稲盛会長は更に続けて仕事の意義について重要なことを述べている。仕事は人格を磨いていく修

行の役目を果たすというところである。仕事は人間の人格を磨くという事とはどういうことであろうか。この言葉も実に深い意味を持つものである。

しかし、人格を磨くといっても、どういう精神的状態が、人格が磨かれた状態かという事が先ず明確でなければならないであろう。

通常考えられることは、あの人は人格者だと言う場合、人と争わず包容力のある円満な人格をいう場合や、多くの人の意欲や能力を引き出すリーダーシップのある人物や、又学問で練り上げた見識と人格で社会的にも教育者として認められている人物等ではないだろうか。

いずれにせよ、以上のような人格を磨くのは並大抵のものでないと思われる。もし、このような人格が仕事によって磨かれるのであれば、仕事というものの意義は人間にとって誠に深いものがあると言わざるを得ない。

しかし、このような人格がどのようにして仕事を通じて磨かれるのであろうか。仕事を生活の資を稼ぐ手段とだけ考えているのでは、人間に内在する様々な能力をある程度は養うことはできても、前述のような人格を磨くことはできないであろう。

それはやはり、自分に与えられた仕事に対して、愛と真心を込めて行うことでなければならないであろう。困難な仕事に立ち向かう姿勢もそこから生まれてくるであろうし、又その困難を克服していくことで不撓不屈（どんな困難にも決してくじけることなく乗り越えていく精神）の人格を養うこともできるであろう。

この決して屈することのない強靱な精神は、やはり磨かなければならない人格の中でも首位に属するものである。

更に円満な人格と言ってもこれも余程の人間の試練を克服したものでなければ養えないものである。どのような職場でも様々な人間がいる。人格が高貴な人ばかりではないのである。言いがかりをつけたり、人の欠点や間違いのみを殊更にあげつらう上司、嫉妬から人の足を引っ張ったり意地悪をする同僚、すぐに感情的に仕事をする人間、責任を他に転嫁する人間、いつも仕事上の不平不満ばかりいう人間、陰で同僚や上司そして部下の悪口をいう人間、数え上げれば切りがないくらいである。

どうですか、そのような人たちに敬意を払うことができますか。又良いところを見つけ出してほめることができますか。もしそれができるようになるなら、それこそ包容力のある度量のある人間と言えるであろう。しかし、これが又一段と難しいのは誰でも理解できるであろう。

世間によく言われる「コミュニケーション能力」がいくら大切だといっても、色々様々な人間関係の中で仕事をしていくのであるから、その能力を身につけるのは、まことに言うは易く行い難いというものである。

包容力というものは、ただ単に思いやりや人間的優しさをいうのでは勿論ない。キリストが「己を憎み悩ませるもののために祈れ」と言われたように、自分を苦しませている人間の幸福のために祈れという様な包容力である。

その様なことができるためには、同じくキリストが言われたように、誠に赦し難い人間にたいしても「七度の七十倍度赦せ」といった心を養っていく必要があるであろう。

愛とはかくも厳しいものなのである。愛しうる人間を愛するのは誰にでもできるであろう。相手の憎むべき言動に対しても、それを真の相手の姿であると思わないで、人間は皆キリスト（神性）なるものが、そして善が宿っているのが人間の本当の姿であると、そして相手の姿はわが心の影である。わが心を磨いてくれる砥石であると思ひ、どこまでも感謝していく心が、相手を赦す心につ

ながっていくのである。

飛行機も空気の抵抗がなくしては離陸できないのである。また、重いバーベルを持ち上げることで力強い筋肉も発達するのである。麦も踏まれてこそ強靱な麦が育つのである。人間の精神も同様である。現実の仕事において、許しがたいと思われる言動を受けることはいくらでもある。しかし、その厳しい圧力こそは、実は自分の魂を磨き高めてくれる砥石となるのである。それがわかれば、その人間を許すというより感謝する心も出てくるであろう、そして、その結果「包容力」を持った人格も形成されるのである。

「人格の完成」が多くの学校およびわが国の「教育基本法」の教育上の目標となっているが、これほど、“言うは易く行いがたし”のものはないのも事実である。また、そのような人格は仕事上で磨かれることが多いのも事実である。

また、同情する心は大切であるが、同情は決して愛とイコールではない。同情はともすれば相手の依存心を助長して、独立した人格の成長を阻害するときもあるのである。愛は「峻厳なる愛」でなければならないのである。事実かどうかは別として、ライオンの親がわが子を崖から落とし、そこから這い上がってくることでわが子を成長させるような峻厳な愛である。そのどん底から這い上がってきてこそ、百獣の王となるのである。

赦すとは我慢することではないのである。積極的に相手の神性を信ずることでもあります。どこまでも深く人間の本性に対して信頼することである。表面に現れた姿はあくまで仮の姿であり、本来の人間は皆善なる神性を宿すものであると信じ、そして赦すべき罪もなきものであると信じていることである。

明治天皇が大逆事件で天皇暗殺を企てた幸徳秋水に対して、「罪あらば 我をとがめよ 天津神民はわが身の 生みし子なれば」と詠われた心境こそ誠の愛であり、真の包容力と言えるものである。

人は、仕事を通じて色々な人間関係の中から、年数がかかってもそのような心を養うことができるのである。なぜならば、人間には皆本質的に神にも通ずる愛が内在しているからである。人間に内在しないものは発現もしないのである。

これが、稲盛会長が仕事は人格を磨く修行の道でもあると言われた理由である。そういう意味では、仕事は人類社会に貢献するのみならず、自他を生かし、そして自他を成長させるものでもある。仕事の意義は実に大きいものである。

終わりに

私がこの論文で論述してきた主旨は、人間の労働をどう捉えるかということであるが、それは同時に「人間は個的存在であると同時に社会的存在である」ということを理解してもらうということであった。そこに個人としての仕事をどう捉えるかという観点と、社会的存在（一般的にいう社会人ではなく、個的存在に対比したものとして表現している）としての仕事をどう捉えるかという、2つの観点から仕事を捉える必要があるのである。

人間は社会的存在であるということは、そこに社会的使命というものがすべての人間にはあるということなのである。

ここでいう社会的使命というのは、人類には目に見えぬが、人間には内に真と善と美を求める精神と、どこまでも進歩向上していく成長心を持ち、この人間特有の精神によって仕事の分業化と高

度化・専門化が拡大していく中で、無限に創造・発展していく人類社会が形成されていくのである。この無限創造の人類社会の発展に貢献していくのが、人間の社会的使命である。

ちなみに、わが国の教育の理想を掲げた「教育基本法」第二条第三項は「・・・自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。」とされ、更に同条第五項では「伝統と文化を尊重し、それらを育んできたわが国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の発展に寄与する態度を養うこと。」と明記されている。

この社会的貢献と人類発展への奉仕の心をもって仕事に携わることが、何よりも大切なものであるということを、最後にもう一度強調しておきたい。

同時に人間は、必ず他の存在を必要とするものであって、他との協力なくしてこの世に存在することは不可能なのである。また仕事そのものも成立しないのである。他と協力しそして他を生かして初めて自分も生きるのである。そこには、人類の共存共栄の世界があるのである。逆に言えば人類は共存共栄しない限り共に存在できないのである。

その協力と生かしあいの中で人間は団体や組織を形成しながら、社会そして国家が成立しているのである。他なくして自分はなく、社会また国家なくして、また自分はないのである。

国家もその独特な個性を持った文化および精神を形成しているのであって、それぞれの国家の使命というものが存在するということが理解できるであろう。いかなる組織も国家もそして人類社会も共に運命共同体なのである。

国家は国家として、その独特の特色をもってお互いに協力し合って、人類の発展に貢献していかなければならない使命があるのである。人類社会の発展と繁栄に貢献しなければならないのである。

経済学者のリカードが自由貿易論で証明したように、各国はその国独自の産物に特化して、その産物をお互いに貿易によって交換することで共に利益を得る事ができ繁栄することもできるのである。他国が豊かでなければ自国も豊かになることはできないのである。また、自国が豊かであって、初めて他国も豊かにすることができるのである。まさに生かし合いの世界である。

これは、国家でも一国だけの繁栄はありえないのであって、人類全体が繁栄してこそ一国の永続した繁栄があるのである。わが国がいかに自動車王国であるといっても、耐久消費財の中では、最も高価な自動車を買ってくれる豊かな国がなければ自動車産業は成り立たないのである。

国家が他の国家の領土を侵略したりするのは、そもそも、国家というものの人類的使命というもののや、国家は共存共栄することによってしか真の自国の繁栄もないということを理解できなかったのである。

他国の犠牲の上に成立した国家に永遠の繁栄はないということがわからないのである。これは人間社会すべてにいえることである。

人類は、長い歴史の中で試行錯誤しながら、この共存共栄の真理を理解しつつあるのである。

歴史的に見ても、そのような侵略国が、今でも繁栄を続けていないことがわかるであろう。他国の征服と奴隷制の上に繁栄を謳歌したギリシャ・ローマは、今は影も形もない。ユーラシア大陸のほとんどを侵略して世界最大の領土を誇った蒙古も今はない。

植民地主義を謳歌し、世界を分割した 20 世紀も今はない。第 2 次世界大戦を経て多くのアジア・アフリカの国が独立を果たした。そして、現代の世界経済のグローバル化とも相俟って、21 世紀は人類発生以来始めて隷属国家が存在しない時代を迎えているのである。

また、企業においても従業員の搾取と犠牲の上に経営者のみが繁栄するような経営を行って、永

続的に繁栄を続ける企業は存在しないし、ましてや人類社会への貢献もできはしない。

人類社会において、個人および国家は、お互いに尊重しつつ敬愛と協力の下に、ともに繁栄し発展していくことが、社会的・人類的使命なのである。

本学の建学の精神の「筑紫の心」に、「親和の心」がある。この親和の心は個人で言えばお互いに信頼して協力し合うところを言い、国家であれば互いに共存共栄し合うところを言っているのである。世界各国が世界連邦政府の下で、一つになる時代を迎えようとしている。その精神的基盤となるものは、各国の「親和の心」である。

そして仕事における「愛の心」とは、真心を込めて仕事を行うことである。そこから専門的知識・技術を磨く真の「知性」も、そして最後まで粘り強く熱意をもって仕事に取り組み、改善する必要があるればその必要に応じて断行する「勇気」もおのずから磨かれていくであろう。

しかし、このような愛の心や知性、熱意や勇気の心も、最初に自分の仕事を、他への奉仕と、社会・国家および人類への貢献と奉仕のところで行うということから出発する必要がある。この心が、生かし合いの親和の世界の実現に向けた根底に流れるものであるからである。

それ故「筑紫の心」では、最後に次のように締めくくっているのである。

「・・・勇気、親和、愛、知性の4つの芽を心の畑に種蒔き育てていくことにあります。筑紫の心は国を愛し労働をいとわず親や祖先をあがめ己をむなしくして社会に奉仕する人間像を理想にしています。」

これが、仕事や人生における生涯を貫くキャリア形成の土台となる心であり、この心を養うことが、本学が目指す教育の理想である。これは、同時にわが国の「教育基本法」の目指す理想でもある。

参 考 文 献

- 1) ブルーノ・タウト著「日本文化私観」講談社学術文庫
- 2) 植芝盛平著「合気道真髓」柏樹社
- 3) ホセ・ルイスゴンザレス・パラド著「マザーテレサの『愛』という仕事」
- 4) 稲盛和夫著「成功への情熱」PHP文庫・「働き方」三笠書房
- 5) エミール・クーエ著「自己暗示」